



北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	高齢者を理解するための自作視聴覚教材に対する学生の反応
Author(s)	安川, 揚子; 木島, 輝美; 大塚, 眞理子; 田中, 敦子; 丸山, 優; 奥宮, 暁子
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要, 第 13 号: 71-78
Issue Date	2011 年
DOI	10.15114/bshs.13.71
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6370
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	

- ・コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等有します。
- ・利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- ・著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

高齢者を理解するための自作視聴覚教材に対する学生の反応

安川揚子¹⁾、木島輝美¹⁾、大塚真理子²⁾、田中敦子²⁾、丸山 優²⁾、奥宮暁子¹⁾

¹⁾ 札幌医科大学保健医療学部看護学科

²⁾ 埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科

看護学概論Ⅱ（1年次後期）の高齢者理解に関する学習の教材として、自宅で生活している高齢者の日常生活場面の映像を使用し学生の反応をみた。調査対象は受講したA大学の看護学生47名のうち研究同意の得られた45名(95.7%)の無記名自記式質問紙調査票である。調査項目は、映像に対する関心の有無とその理由、高齢者に対する関心度、意見や感想である。その結果、映像をみた学生の8割以上が、高齢者への興味や関心をもち、高齢者と関わってみたいと回答したことから、学習意欲を高める教材としての効果が期待された。高齢者が生活しているありのままの映像を用いることで、日常生活動作、援助、介護者の思いなどを捉えていたことから、看護者としての観察力を身につける教材となりうることが示唆された。

キーワード：老年看護学、教育方法、視聴覚教材、高齢者理解

Students reaction to original audio-visual materials designed to facilitate understanding the elderly

Yoko YASUKAWA¹⁾, Terumi KIJIMA¹⁾, Mariko OTSUKA²⁾, Atsuko TANAKA²⁾,
Yu MARUYAMA²⁾, Akiko OKUMIYA¹⁾

¹⁾ Department of Nursing, School of Health Science, Sapporo Medical University

²⁾ Department of Nursing, School of Health and Social Services, Saitama Prefectural University

We studied the reaction of nursing students to teaching materials for Nursing introduction II (taught at the end of the first year) that use visual images of the daily lives of elderly living in their homes. The participants in the study were 45 nursing students at the university who agreed to fill in anonymous questionnaires (45 of 47 students (95.7%) agreed to participate). The questionnaire asked about how interesting the visual images were and why, their interest in the elderly and other opinions and comments.

Over 80% of the students who used the audio-visual materials expressed an interest in the elderly. Their answers indicated they were interested in relating to the elderly, which made us hopeful that this kind of teaching material will help raise student motivation to study. The audio-visual materials of elderly in their activities of daily life, showing their needs and caregivers' feelings made it possible for the students to more easily visualize their role as nurses.

The students achieved their study goals through the use of audio-visual materials taken from the real lives of elderly, indicating the effectiveness of these study materials.

Key words : Gerontological Nursing, teaching method, audio-visual materials, understanding the elderly

Bull. Sch.Hlth.Sci.Sapporo Med. Univ 13:71-78(2011)

I はじめに

老年看護においては、加齢による身体・精神・社会的側面の変化とそれに伴う生活上の変化を理解するとともに、高齢者の健康レベルや生活の質に考慮した支援が求められている。しかし、学生にとっては自身が体験していない年齢である高齢者を理解し、さらに知識を統合し看護実践することの難しさがある。看護教育では、模擬患者^{1~3)}、OSCE⁴⁾、シミュレーション教育^{5~6)}など現実味のある演習方法を取り入れて看護実践につなげ、対象者との関係構築や看護者としての態度を身につけることを期待している。一方、従来から使用されている視聴覚教材は、講義内容がイメージしやすい、理解しやすくするなど学習への動機づけを高めるのに役立つ教育効果^{7~10)}が報告されている。老年看護学教育ではこれまで学生の高齢者への関心と理解を促すための方法のひとつとして、高齢者疑似体験¹¹⁾の報告がある。視聴覚教材は、映画の教材化が検討されたり¹²⁾、映画教材やテレビドラマを用いた教育効果^{13~14)}が報告されているが、これらの多くはシナリオをもとに撮影されたフィクション映像であるため、制作側の意図が少なからず働くことは否めない。しかし、高齢者の実態が描写されたビデオ映像を教材として用いることで、イメージしにくい高齢者特有の状態や特徴を映像世代の学生は視覚的に捉えることができ高齢者に対する見方の変化に効果がある¹⁵⁾ことが示唆されている。今回、我々は高齢者から直接学びを深めるということに着目し、シナリオのない高齢者のありのままの生活映像から視聴覚教材を作成し、それを講義で活用したのでここに報告する。

II 目的

本研究の目的は、高齢者の理解を深めるための教材として作成した自作視聴覚教材の効用とその教授法について学生の反応から検討することである。

III 方法

1. 視聴覚教材の映像

映像の対象A氏は、自宅で家族の介護をうけて生活している認知症がある101歳女性である。構成は、おいたち（現在の生活に至るまでの生活史がわかるように女学校時代や教員時代、家族の写真を取り入れた）、自宅での日常生活場面（食事、排泄、清潔、移動、活動など1日の流れを時系列にした）、通所サービスの様子や診療所での受診場面などで、所要時間は30分である。映像の中には、ナレーションやテロップはなく、聴きとることができる音声は登場している人物の会話と生活音だけである。A氏が自らの意思を語る場面はほとんどない。この映像は、奥宮が

大塚らと高齢者理解を促すための教材作成を共同研究ですすめ、埼玉県立大学倫理委員会の承認を得て撮影されたものである。生活場면을撮影すること、映像を編集して教材として使用すること、学会発表や論文投稿予定であることについて、A氏から意思を確認することは困難であったため対象者の家族に対して説明をした。いつまでも社会貢献をして生きたいというA氏の姿勢をみてきた家族からの代理同意とともに家族の同意も得た。

2. 教材の提供

1年次に開講されている看護学概論Ⅱ2単位30時間のうち5時間が老年看護学概論の時間である。前半の3時間の講義内容は、老年期の理解、老年期を生きる人々の特徴と健康、加齢に伴う変化、高齢者をとりまく社会で、後半の2時間で自作視聴覚教材を使用した。自作視聴覚教材のねらいは、学生が高齢者の特徴を理解し、高齢者への興味や関心を高めて老年看護学を学んでいく動機づけとなることである。（表1）

表1 超高齢者の事例学習

目的
老年期の特徴として学習した知識を活用し、老化現象が顕著に現れている超高齢者の特徴を理解し、老年看護学の対象となる超高齢者への看護の動機づけを高める。
目標
1) 対象となる超高齢者の活動・参加（生活状況）の実際を知ることができる。
2) 対象となる超高齢者の身体的な特徴として、元気そうで若そうに見える、予備力が乏しいことが理解できる。
3) 対象となる超高齢者の身体構造・心身機能の老化による特徴を示す情報に気づき、理解することができる。
4) 対象となる超高齢者の個人因子のうち、価値観や信念を知ることができる。
5) 対象となる超高齢者の環境（物理的、人的、制度）を知ることができる。
6) 1)～5)の情報は相互に関連し合っていること（ICFの概念構造）が理解できる。
7) 超高齢者の現在の状況は、長い時間経過によって創られていることが理解できる。
8) 超高齢者の看護として、その人の意思を尊重することが重要であると感ずることができる。
9) 老年看護実践への関心を高めることができる。

教材を用いた日は、生活機能を重視して映像をみるようにICF（生活機能分類）について講義し、映像をみる前に登場する対象高齢者のイメージを膨らませるために事例紹介をした。次に学生は映像を視聴しながら読みとった情報や事実をワークシートの情報欄に記入した。その後、再度映像を視聴しながら教員がその中から読みとることができる情報とその解釈について解説を行い、学生は新たに気がついた情報をワークシートに追記した。その後、情報およびその解釈例を記載したワークシートを配布し、まとめを行った。

3. 調査対象および調査方法

調査対象は受講したA大学の看護学生47名に配布した調査票のうち45名（回収率95.7%）から回収された調査票である。調査日は2010年1月12日である。調査項目は、映像に対する関心の有無2項目とその理由、高齢者に対する関心度

(5段階評定法)3項目、映像全般に対する感想、授業に対する意見や感想である。自由記述については内容を類似性によって整理し、共通する意味を表すカテゴリーを抽出した。

4. 倫理的配慮

学生に対しては、講義開始時に自作視聴覚教材を使用して講義をすること、および学生の意見を反映した自作視聴覚教材の完成を目指していることを伝えた。講義終了後に研究の趣旨を口頭及び文書で説明し授業ならびに教材に関する自記式質問紙調査票を配布した。調査票は無記名で個人を特定することはなく、回答内容および協力辞退は成績評価と関係ないことを保証し、データ使用に対する同意の有無を記載するとともに調査票の提出をもって研究への同意を得たものとした。

IV 結 果

1. 映像に対する関心について

1) 映像の中で驚いた場面について「あった」は37名(82.2%)、「なかった」は8名(17.8%)であった。具体的な内容の記述数は47で、【自立度の高さ】、【加齢に伴う身体変化】、【他者との交流】、【計算問題ができる】の4つのカテゴリーが抽出された。(表2)

2) 映像の中で興味や関心が持てた場面について「あっ

た」は39名(86.7%)、「なかった」は6名(13.3%)であった。具体的な内容の記述数は54で、【ひ孫との関わり】、【自立度の高さ】、【本人の意欲】、【介護方法】、【関わる人の声のかけ方】、【高齢者の気持ち】、【全般的に興味あり】の7つのカテゴリーが抽出された。(表3)

3) 映像全般に対する感想の記述数は73で、【高齢者に注目したもの】、【介護者に注目したもの】、【看護者としての視点】、【本視聴覚教材に関すること】の4つのカテゴリーが抽出された。【高齢者に注目したもの】のサブカテゴリーは『自立度の高さ』、『高齢者の心理』、『理解力の高さ』、『他者との交流』、『身近な高齢者との比較』、『日常生活状況』、『高齢者になること』、『驚き』であった。【介護者に注目したもの】のサブカテゴリーは『介護の大変さ』、『老老介護』、『介護の様子』、『声掛け』であった。【看護者としての視点】のサブカテゴリーは『本人の力を大切にすること』、『本人の意思の尊重』であった。【本視聴覚教材に関すること】のサブカテゴリーは『意見』、『わかりやすい』、『勉強になった』、『興味が持てた』であった。(表4)

2. 高齢者に対する関心度について (図1)

高齢者に対する関心度 3項目の回答は5段階評定法である。1) 興味や関心を持つことができたかは「とてもできた」23名(51.1%)と「まあまあできた」17名(37.8%)を合わせて40名(88.9%)であった。2) 実際に会ってみた

表2 驚いた場面の具体的な内容

記述数 47

カテゴリー	主な記述内容
自立度の高さ	<ul style="list-style-type: none"> ・100歳を超えても、自力で出来る事がすごく沢山あって驚いた、ベッドから起き上がる・トイレへの移動・食事・椅子から立ち上がる・顔を洗うなど。 ・101歳で要介護4とのことだったので、もっと色々出来ないことがあるのかと思っていたら、動きは確かにすごくゆっくりだけれど、自分で出来ることは途中までもやっていたので驚いた。 ・筋力が衰えていると言っても、ほとんど1人で移動ができ、食事や排泄もほぼ1人で可能であったこと。一番びっくりしたのは、ベッド上で1人で上体を起こせることだった。介護が必要な場面を考えて時、初めに思いついたのがベッドで上体を起こすことであったため、余計びっくりした。 ・自分で食事をとったり、トイレに行ったり、101歳でもあんなに元気に暮らしていけるんだととても驚いた。 ・骨折した後でも自分でかなり歩く事ができていたこと。 ・私が想像していた101歳の方の行動よりもしっかりしている部分が多かったように感じた。寝たきりの状態でないということが、行動範囲や意欲にも大きく影響すると思った。 ・入浴する場面、自分で立ちあがったり、洗ったり、デイサービスの人の援助が最低限であったこと。 ・意外と超高齢者がしっかりと意識を持っていること。 ・指示に従っていたこと。
加齢に伴う身体変化	<ul style="list-style-type: none"> ・力むことができなくなり、下剤を服用しないと便を出せないこと。 ・排便する力がなくなり2日に1回薬を飲むことにも驚いた。 ・尿意を感じることもできなくなること。 ・排泄の時に自分でズボンや下着を脱ぐことはできないが、はくことはできること。 ・入浴の場面で全身の皮膚が垂れ下がっていたこと。 ・体の皮膚が垂れて、血管がよく見えること。 ・すごく足が細く、筋力の低下がわかりやすかったこと。 ・体の痛みが強いということ。
他者との交流	<ul style="list-style-type: none"> ・話をすることがあまりないこと。 ・あまり言葉を発していなかったこと。話すという動作が疲れてしまうことなのかもしれないが、さみしい感じがした。 ・入浴時しゃべったこと、居間でひ孫たちと遊んでいて笑ったこと。普段無表情で黙っている時とのギャップに驚いた。 ・自分が好きな入浴や、ひ孫と遊ぶ時などは明らかに元気が違ったところ。 ・家庭ではほとんど言葉を発することがなかったが、施設でのデイサービス中に職員と話したり、入浴中に笑ったとき。 ・表情の変化は、時々笑顔が見られる程度で、あまり変化がないこと。
計算問題ができる	<ul style="list-style-type: none"> ・数学のプリントを解いたりすることがあると思わなかった。 ・計算問題をやっているところ、しゃべらないし、意思をあまり表していなかったのが、ボーッとしているのかなと思っていたが、しっかり計算ができるくらいの処理能力があることに驚いた。 ・101歳になるのに2桁の計算問題を正確に解いていたことと、長い時間そのプリントに取り組んでいたことに、とても驚きました。

表3 関心や興味が持てた場面の具体的な内容

記述数54

カテゴリー	主な記述内容
ひ孫との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・ひ孫の顔を見て笑っている顔を見て、高齢者にとって何をしている時が楽しいのか興味を持った。 ・ひ孫と接している時のおばあちゃんの表情がとてもよくて、子供や赤ちゃんと接することが大切だと思った。 ・子供と遊んでいるときにすばやく動いていたところ。
自立度の高さ	<ul style="list-style-type: none"> ・全介助というわけではなく、できる事も沢山あったこと。 ・筋肉も衰えて、行動するのが大変だろうに、かなりのことを1人でできる事に感心した。 ・あまり物事を発しないが、朝起きた時や、トイレ、入浴、食事と日常の様々な場面でどうするべきかを理解し、自分で行なうことができていること。 ・食事や排泄など、沢山の場面で自力でできる事はなるべく自分でやっていたことが、印象的であった。 ・意外と自分の力で出来ることが多いと思った。
本人の意欲	<ul style="list-style-type: none"> ・計算プリントを行っている時、文字を書くスピードはゆっくりだったが、ほとんど答えはあっていたというシーンが印象深い。 ・娘さんが大腿骨骨折のことについて語っている場面で、「自分がしたいことをするために、自分が痛くない程度まで動く」という言葉。リハビリを熱心にしなくても他の部分を痛めたり、しないと衰えていくのだと改めて感じた。 ・家ではあまり反応しないのに、デイサービスではきちんと返事ができるのはどうしてか気になった。 ・家族と他人の返事のしかたの違い。 ・デイサービスの入浴の場面では、職員の人が大きくゆっくりと話しかけると、きちんと相槌をしていた。
介護方法	<ul style="list-style-type: none"> ・全体を通して、自分でできることはできるだけ自分でさせている場面。 ・家族も、その他介護者も、“残っている機能を活かす”援助をしていた。こうした援助があるから、食事やトイレなどはある程度自立して行う事ができるのだと感じた。 ・周りの人の介護がしてあげるだけのものではなかった。 ・入浴時にあった、シャワーの上についている手すり。画期的であると思った。 ・介護の方法についてどのような介護があるのか、適しているのか。 ・入浴の仕方、排泄の仕方など。高齢者と一緒に生活したことがないので、初めて見る事ができた。
関わる人の声のかけ方	<ul style="list-style-type: none"> ・介護する側がたくさん声をかけてあげることは介護される側にとって安心するだろうなと思った。 ・1つ1つの動作を行う際の、声掛けの大切さを感じた。
高齢者の気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者がどんなもの、ことに興味や関心を持つのか。 ・介護されるということにどのように感じているのか。
全般的に興味あり	<ul style="list-style-type: none"> ・ほとんど全てに興味を持ってました。 ・どんな風に生活しているのか全般的に興味があった。

表4 映像全般に対する感想

記述数73

カテゴリー	サブカテゴリー	主な記述内容
高齢者に注目したものの	自立度の高さ	<ul style="list-style-type: none"> ・101歳になると目や耳も不自由で、身体も不自由で、介護者に全て任せているというイメージがあったが、予想していたよりも自ら動くことができていたのすごいと思った。
	高齢者の心理	<ul style="list-style-type: none"> ・何もかもが誰かのお世話になっていて、どう思っているのだろうかと思った。 ・自分の意志を全く伝えられないのは辛いのかと思った。 ・あまり話す人ではなかったのに、毎日生活していてどんなことが楽しいのか聞いてみたい。 ・家族の前では全く話さないが、色々考えているのではないかなと思った。
	理解力の高さ	<ul style="list-style-type: none"> ・自分でやったり、何をしようとしているのかもわかっている様子もすごいと思った。 ・自分の意志で、理解し行動しているのがとてもすごいと思った。
	他者との交流	<ul style="list-style-type: none"> ・沢山の人の協力があったからこそ、Aさんの生活は成り立っているのだなと思った。 ・身の周りにいる人に対してあまり口を聞かなく、表情もあまり変わらなかったが、外では声を出して返事をしたり、ひ孫といるときは笑顔を見せたりする様子が見られたのが驚いた。 ・あまり話さないのに、体のどこかが痛かったりしたときに伝えるのがとても遅くなるのではないかなと思った。
	身近な高齢者との比較	<ul style="list-style-type: none"> ・100歳の曾祖母がいますが、Aさんと比較して色々な違いがあることがわかった。私の曾祖母の方が表情が豊かであり、また、もっと口数が多い。会話しながら、おかしいことがあったら声を出して笑ったり、自分の力で出来る事がとても多い。年齢が同じくらいでも、その人のこれまでの生活習慣などによって個人差があるのだ、と思った。 ・96歳の高齢者がいるが、とても元気で普通に生活している。やはり、小さい頃の経験や努力などが今出て来ていると感じる。 ・98歳になるまで健在だった曾祖母がいたため、介護の様子は実際に見て体験したことに近いところもあると思った。 ・自分の祖父母よりもかなり年上だったので祖父母との違いがかなりあった。
	日常生活状況	<ul style="list-style-type: none"> ・自分でできることは自分でやることや、自分の意志で動くことが大切だと思った。 ・全ての動作があんなにゆっくりであるのだと思った。 ・超高齢者の方の生活は大変そうで自分自身でできている事も多いが介護なしではやはり成り立っていかないと感じた。 ・歳を重ねていくと出来ないことはやはり増えていくが少しだけでも手を貸してくれば出来る事はまた増えていくのだと思う。
	高齢者になること	<ul style="list-style-type: none"> ・人とのつながりや、人が1人では生きていけないと感じるのは、高齢になってからかもしれないと感じた。
	驚き	<ul style="list-style-type: none"> ・驚くことばかりだった。 ・身体面の老衰は結構なもので、排便も筋肉の衰えにより困難なのだということがびっくりした。

介護者に注目したもの	介護の大変さ	・歳をとるにつれて自分で出来る事の幅が少なくなり、周りの人の介助が必要になり、本人にとっても周りの人にとっても大変な事が多くなるのだなあと改めて感じた。 ・自分では、言葉をなかなか発してはくれない人を相手に介護するのは、とても大変なことだと思った。
	老老介護	・超高齢者を1人しておくことはできず、周りの誰かが見ていないといけないのは大変であると感じた。 ・高齢者が高齢者を介護するという点について、大変な苦労があると思った。
	介護の様子	・生活の順番や習慣を決めて毎日送るように介護者がしていた。 ・介護をする人たちは手伝いすぎずにできることをやらせていたことが印象に残った。
	声掛け	・介護者は、はっきり明るく反応がなくても声掛けをしていて、大切だと思った。 ・耳元で大きな声で言ってもわからないこともあるので、大きくはっきりと言わなければならないのだと思った。
看護者としての視点	本人の力を大切に する関わり	・自分でできそうな所は何もかも援助するのではなく自分でやるように促すのがリハビリにもなるし良いと思った。 ・見守りながら、自分でできることはさせることが大切だと思った。
	本人の意思の尊重	・101歳、要介護と聞いてだけで、私は寝たきりに近い状態を想像してしまっていたが、Aさんは言葉こそあまり発しないものの、人の話は理解しているし、非常に緩慢ではあるが自分のことは自分でできているので、本当に驚いた。老年の方をケアする場合はできるだけ本人の意思を尊重すべきだと思った。
本視聴覚教材に関する こと	意見	・生い立ち部分の写真が流れるのが速すぎてよく考える時間がなかった。 ・音声聞きとりにくかった。
	わかりやすい	・こうした事例を、話で聞くのではなく、映像で見れるのはとても伝わりやすく、こういう授業もいいなと思った。 ・嬉しい時や楽しい時は素直に笑うため、感情の変化がわかりやすかった。 ・立場の違う人がどのように高齢者と接するのか、ということもわかって良かった。
	勉強になった	・普段は100歳以上的高齢者を見る機会がないため、初めてじっくり見ることができて、とても勉強になった。
	興味を持てた	・排泄や入浴など普段はあまり見ることのできない高齢者の実際の生活を見ることができてとても興味をもてた。

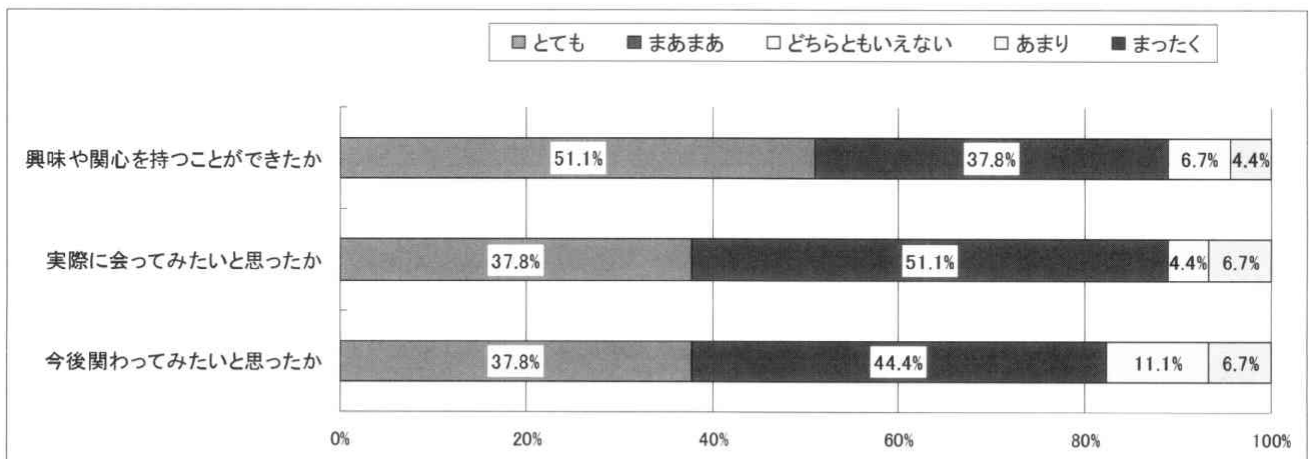


図1 高齢者に対する関心度 n=45

いと思ったかは「とても思った」17名（37.8%）と「まあまあ思った」23名（51.1%）を合わせて40名（88.9%）であった。3) 今後関わってみたいと思ったかは「とても思った」17名（37.8%）と「まあまあ思った」20名（44.4%）を合わせて37名（82.2%）であった。

3. 映像を使った授業に対する意見や感想

今回の授業に対する意見や感想の記述数は24で、【視聴覚教材の使用】、【本視聴覚教材への要望】、【今後の授

業に対する希望】の3つのカテゴリーが抽出された。【視聴覚教材の使用】のサブカテゴリーは『勉強や参考になった』、『高齢者のイメージが変わった』、『驚きは無い』、『不安になった』であった。【本視聴覚教材への要望】のサブカテゴリーは『解説や説明がほしい』、『写真の切り替わりが早い』であった。【今後の授業に対する希望】のサブカテゴリーは『高齢者についてもっと知りたい・関わりたい』、『医療・福祉サービスについて知りたい』であった。（表5）

表5 授業に対する意見や感想

記述数 24

カテゴリー	サブカテゴリー	主な記述内容
視聴覚教材の使用	勉強や参考になった	<ul style="list-style-type: none"> こうした事例を紙面や口頭でなく実際の映像として見た方がより勉強になるなと感じた。協力していただくことは簡単ではないが、こうした学習がもっと増えてもよいと思った。超高齢者についてとても興味を持った。とても勉強になるビデオだった。 超高齢者の生活、またそれを取り巻く人たちの生活がよくわかり、とても勉強になったと思う。 家族、ヘルパー、デイサービスの面からの介護が具体的にどのように超高齢者に行われているか知る事ができ、参考になった。 事前に映像に出てくる超高齢者の方の基本情報があったので、理解しやすかった。 今回、2回ビデオを鑑賞して、1回目は解説なしで自分でまず気付くことから始めて、2回目に解説をつけるという方法で、とてもわかりやすく、興味ももてる授業でした。かなりリアルなビデオの内容から、援助の大変さや、援助を受けている人それぞれに合わせた援助の必要性がわかり、とても勉強になりました。 育ち方によって変化するというのも改めて認識できたと思う。 若い頃、活発に活動している人は老化現象がおこっても計算ができたりしていたので、どんな生活をしてきたかが老化に関わってくることを知ることができた。 以前は出来たことが少しずつ困難になっていく高齢者の気持ちを十分に理解し、適度な介助を行っていくことが大切だということがわかった。
	高齢者のイメージが変わった	<ul style="list-style-type: none"> 超高齢者は、あまり自分から活動するイメージがなかったが、今回のビデオを見てイメージが変わった。
	驚きは無い	<ul style="list-style-type: none"> 身近に超高齢者がいるので、あまり新しい驚きというのはなかった。
	不安になった	<ul style="list-style-type: none"> 自分や親が超高齢者になったとき、どんな気持ちでどのように過ごしているのか興味を持つと共に、少し不安になった。
本視聴覚教材への要望	解説や説明が欲しい	<ul style="list-style-type: none"> 映像の中に、少しでも解説が入っていた方がわかりやすい。 生い立ちのところにもう少し解説を加えるとよりわかりやすい。 心身機能や身体構造についての説明をもう少し加えてくれると良かった。
	写真の切り替わりが早い	<ul style="list-style-type: none"> 写真が切り替わるのが少し早いと思った。
今後の授業に対する希望	高齢者についてもっと知りたい・関わりたい	<ul style="list-style-type: none"> たくさんの人の実際の生活を見てみたい。 身近に超高齢者がいないので、会う機会が設けられればいいと思った。実際に話をしてみたいと思った。 今まで老年に対してあまり良いイメージがなかったが、高齢者とたくさん接してみたいと思った。老人ホームに訪問する授業など、高齢者と接する機会がほしいと思った。
	医療・福祉サービスについて知りたい	<ul style="list-style-type: none"> 超高齢者が必要としている医療や福祉サービスはこの映像からはよくわからなかったもので、知りたいと思った。

V. 考 察

1. 自作視聴覚教材の効用について

視聴覚教材が効果的であるためには学生の学力や興味にあったものである必要がある¹⁶⁾ため、老年看護の初学者である学生に対して講義のなかで使用した自作視聴覚教材について学生から反応をみた。その結果、映像をみた学生の8割以上が驚いた場面や興味や関心をもつ場面があったと回答したことから自作視聴覚教材の作成目的であった高齢者への関心を高めるものであったと考える。また、8割以上の学生が高齢者への興味や関心をもち会って関わってみたいと回答したことから、学習意欲を高める教材となり得ることが期待された。これらの理由として映像の内容がシナリオ通りに演じたものではなく、学生が日常目にするのでない現実の生活場面であったこと、A氏が101歳で加齢による生理的变化や特徴を映像から観察することができたことが考えられる。自作視聴覚教材に対する学生の反応をみると、映像の中で驚いた場面が、自立度の高さや身体変化などの身体面であったこと、また、他者との交流という社会性や計算能力の知能面であったことから、これまでに高齢者と関わる機会が少なく、初めて見た場面であったと推察された。一方、これまでに高齢者と接する機会があった学生はA氏と対比させることで高齢者の多様性に気

づいていた。映像の中でA氏が自らの思いを語る場面がほとんどないことや学生が同じ時代を生きていないため、高齢者の意思やこれまでの生活背景を想像することの難しさがある。しかし、ひ孫との関わりの中で見せた表情や他者との対応、高齢者の意欲や気持ちという感情面に興味や関心をもったことは、高齢者を知りたいという学生の探求心につながった可能性がある。このように高齢者本人の意思や望みを考えていくことはアセスメントの大切な視点のひとつであると同時に個別的なケア内容に影響するため、今後の老年看護活動論の中で強調し、さらに実習の中で体得することができるよう指導していく必要がある。

2. 自作視聴覚教材を用いた教授法について

自作視聴覚教材は映像から情報を読みとることに重点を置いたためナレーションは入れず、聴きとれるのは生活場面での生活音や会話だけである。その結果、30分の映像の視聴に集中することができたと考える。また、ICFの講義を行ってから映像を視聴したことが既習内容の想起となり、本人のできることとできないこと、本人を取り巻く環境に注目した視点で観察することを可能にしていたと言える。学生の反応を今後の老年看護の教授に生かすために自作視聴覚教材を老年看護活動論の看護過程演習にもとり入れていく必要があると考える。従来の紙面上の事例での看護過程演習は、患者の情報が予め提示された内容に留まるためアセスメントの視点を広げることに限界がある¹⁷⁾と指摘さ

れているように、各学生のイメージの中でつくられた対象像での学習にとどまり、実際に観察したり確認することができない。そのため、実習場面では、記録や職員から得た情報に頼る傾向がある。今後は老年看護活動論の看護過程演習の事例に紙面上の情報と映像を取り入れることで、生活場面、表情や会話、動作がリアリティとなり、学生自身が観察した内容も情報として活用できるようになると考える。そして、アセスメント能力をつけるために、観察された情報をどのような視点で解釈分析していくのか、それらをどのように看護援助の方法につなげていくことができるのかを看護過程演習を通して考えることで実習に向けたシミュレーションになり得ると示唆された。

本視聴覚教材への要望としてあがった生いたち部分で使った写真の切り替わりの速さや解説については、これまでの人生や人となりの理解を助けるために、必要最低限のナレーションやテロップの使用を検討していく予定である。また、映像内容に対する説明不足や解説の不十分さに対しては、授業案の見直しによる改善を図っていく。

本視聴覚教材を使用したことに対する学生の反応として、プラスのイメージだけでなく高齢者になることへの不安が出され、映像から受けた印象によって学習効果を減じてしまう可能性があり得る。今回の事例は高齢者を一般化するものではないが、教材として使用する時に映像が学生に与えるインパクトの強さを再認識したうえで使用していく必要がある。

V. 今後の課題

自作視聴覚教材が看護者としての観察力を身につける教材になり得る可能性が示唆されたことから、課題となった映像内容に対する説明不足や解説の不十分さを踏まえた自作視聴覚教材の完成を目指す。今回、老年看護学概論のまとめとして自作視聴覚教材を用いたが、今後は老年看護学概論の導入に用いて高齢者に対する興味や関心を高める授業案を検討していく。また、老年看護学概論で使った自作視聴覚教材の事例を、老年看護活動論の看護過程演習につなげるとともに、実習へ連動させる教授法を検討し実践していくことが課題である。

謝 辞

撮影にご協力くださった皆様に心よりお礼申し上げます。また、本調査にご協力をいただいた学生の皆様に心から感謝申し上げます。

文 献

- 1) 福岡美紀, 津本優子, 内田宏美他: 基礎看護教育における模擬患者を導入した看護過程の教育効果とその課題. 島根大学医学部紀要29: 15-21, 2006
- 2) 古村美津代, 木室知子, 中島洋子: 老年看護学教育における模擬患者導入の臨地実習への影響. 老年看護学13 (2): 80-86, 2009
- 3) 福井みどり: 看護教育における模擬患者の活用と今後の展望. 看護管理19 (11): 938-942, 2009
- 4) 内田倫子, 土屋八千代, 赤星成子他: 成人看護学におけるOSCEの試み. 南九州看護研究誌6 (1): 55-61, 2008
- 5) 阿部幸恵: シミュレーション教育を支える教育観とプログラム作成の一連. 看護管理19 (11): 923-928, 2009
- 6) 岩本由美: ディブリーフィングによって学びを深める-看護基礎教育におけるシミュレーション学習-. 看護教育50 (9): 802-805, 2009
- 7) 若佐柳子, 竹内登美子: 本校学生の視聴覚教材の利用状況と学習に関する意見調査. 順天堂医療短期大学紀要8: 13-23, 1997
- 8) 塚越フミエ, 堀良子, 猪又克子他: 看護教育におけるコンピュータ・VTRの教具利用に関する調査(1)-看護婦教育機関におけるコンピュータ・VTRの普及状況およびCAIに対する意見-. 看護教育35 (1): 60-64, 1994
- 9) 堀良子, 塚越フミエ, 猪又克子他: 看護教育におけるコンピュータ・VTRの教具利用に関する調査(2)-視聴覚メディア(コンピュータ・VTR)に対する4年制看護大学生の意見-. 看護教育35 (1): 65-67, 1994
- 10) 佐伯胖: 看護教育におけるCAIの可能性. 看護展望15 (6): 641-645, 1990
- 11) 森本美佐: 学習意欲を高める授業-高齢者疑似体験授業の改善を試みて-. 奈良文化女子短期大学紀要37: 133-138, 2006
- 12) 小山敦代, 石鍋圭子, Y・S・リボウイツ他: 「老年に関する映画」の教材化検討-14本の映画鑑賞とディスカッションを通して-. 看護教育49 (5): 428-433, 2008
- 13) 古城幸子, 木下香織: 高齢者理解を広げる映画教材の教育効果. 新見公立短期大学紀要28: 1-6, 2007
- 14) 馬場口喜子, 田中正子, 光木幸子: 老人理解の学習効果-テレビドラマを用いて-. 京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要3: 175-179, 1993
- 15) 佐藤光年, 川島珠実, 荻野朋子他: メディア教材は、学生の高齢者理解を深めることに効果的か-ビデオ教材を用いた学習の実践を通して-. 四日市看護医療大

安川揚子、木島輝美、大塚真理子、田中敦子、丸山優、奥宮暁子

学紀要3（1）：1-7，2010

16) 加藤万里子：看護教育におけるビデオ教材の有効性.

看護教育33（6）：411-415，1992

17) 前掲論文1)